

令和7年11月15日

令和7年度函館市社会福祉大会

講演 助け合いが被災地の復興を支える

～ 災害時のボランティア活動の大切さ ～

講師 オフィス園崎 園崎 秀治様 の講演のまとめ

開催日 令和7年11月15日（土）

場 所 函館市総合福祉センター

園崎さんは、ディズニーランドのおひざ元である千葉県の浦安市に住んでいます。幼少の頃函館や札幌でも暮らしたことはありましたが、小学校に上がるころはもう浦安に住んでいました。

全国社会福祉協議会に27年お勤めになり、その後独立されました。被災地支援の仕事が多く、災害とは切っても切れない縁になっている。今は、災害をテーマに仕事をしていて、たくさんの被災地を訪問しました。

災害は発生すると、支援のために、ボランティアセンター（ボランティアの調整約）が立ち上がり、それは現在社会福祉協議会が担っています。

災害が発生し、ボランティアセンターが立ち上がったとしても、だいたいどこから手を付けていいのかわからない状態です。私は、152か所の災害現場に訪れ、外から

支援しました。タイミングは翌日が多いです。災害も様々ですし、地域性もありますし、人も違います。ですから一つとして同じものはありません。

平成28年の台風では、北海道が2回続けて、被害を出しました。平成30年の胆振東部地震では、北海道中の電気が消えるという事態になりました。電気がないと医療機器も動かず、命に関わることもあります。また、近年では、道路の陥没、断水などもあります。水がないと、トイレも使え



ない、風呂も入れない、洗濯もできないなどの状態に陥り、衛生状況が悪くなり、感染症を発して、命を落とすことがあります。いわゆる災害関連死です。



台風 15 号の時は関東、東海に竜巻が起きました。牧之原市を襲った竜巻は歴史上でもかなり大きい物でした。竜巻の通った跡がきれいに電柱が倒される、窓ガラスが割られる、風が家の中に入り屋根を吹き飛ばすなどの被害がありました。

台風 22、23 号が八丈島を襲いました。八丈島は台風が通ることが多いので、かなりの備えをしていました。それを上回る規模の台風でした。でも、皆さんは、そのことをあまり知らないと思います。ほとんど報道されませんでした。理由は、死者がいなかったことです。死者がいないと報道されないことが多いです。

亡くなる方の数と復旧にかかるたいへんさは比例することはありません。一か月以上たった今でも、やっと復旧が始まるところもあります。

自然災害に対しては、人間の力ではどうしようもないことが多いです。復旧、復興していくしかありません。全てを失うというストレスは非常に大きいものです。心理的なストレスも相当あります。

能登地震では、亡くなった人の数が毎月増えています。その理由は災害関連死が増えているからです。直接死の 2 倍以上になりました。悲しいことに自死もあります。

能登ではコンビニは 19 時に閉店します。人がいなく、普通に営業できないからです。家を更地にしても、建て直せない人もたくさんいます。過疎地域がみるみるうちにさらに人口減少を起こしています。

東日本大震災の時、浦安の多くの地域に液状化現象が起こりました。85% ぐらいです。その理由は、埋め立て地だったからです。地面が 2 m ほど、沈下しました。大き

いマンションなどは、しっかりボウリングし、杭を打っているので大丈夫ですが、周りが全て 2 m 下がってしまったので、外へ出られない状態でした。

土砂災害の場合、役場は道路は、片付けをしますが、家まではやってくれません。私有地だからです。災害の場合公助には限界があります。屋根が壊れた場合ブルーシートは配りますが、屋根に張ってくれません。屋根の上にブルーシートを張るなど誰でもできるものではありません。そこでボランティアが求められるわけです。

ボランティアセンターに登録している NPO 法人もいます。それぞれの分野のスペシャリストです。それぞれ本業がありますが、災害が起きると真っ先に駆けつけてくれる集団です。消防、自衛隊が、屋根に上ってブルーシートが張れるわけではありません。そのような専門家から、講習を受ける場合もあります。

災害が起きると多くのごみが出ます。匂いもすごいですし、はんばない量です。仮置き場に置きますが、そこまで運ぶのもボランティアです。

このようにボランティアがいなくなかなか前に進みません。暑い時、寒い時、地域によっても対応が異なります。

役場にダメージがあると、尚さら、公的扶助は機能しなくなります。返事も来ないこともあります。

共助は、隣近所、自治会、自主防災組織などで助け合うことです。地域として機能しているか考えて見るのが大切です。

普段は、悩み事を持っている人と、それをサポートする人がだいたいバランスを保っています。しかし、災害になるとこのバ

ランスが大きく崩れてしまいます。

災害に遭っていない人が、一時的に助ける側に回することは大切なことです。しかし、バランスのとれていないままになっていることがあります。その要因の一つとして、被災者の側で、ボランティアを受け入れるかどうかということです。災害が起きると、「行って助けてあげたい。」という人はたくさんいます。しかしながら、被災地の方で、「いない。」と言われれば、それまでで、調整できません。

災害に遭ったら、自分だけでは、対応できません。助けを求めるという「受援力」が大切です。助けてもらうことによって救われる命がたくさんあります。

知らない人が来るのは嫌だ、こわい、遠慮する、など、「助けます。」を邪魔する考えもある。大きく見ても、国が「助けます。」と言っても、県が「けっこうです。自分たちでやります。」と言えばそれまでです。もろ手を挙げて、「助けてください。」と言えば助かる命の現実は、たくさんあります。

ボランティアというと若い人の力仕事というイメージがあり、注目されます。しかしそれだけではありません。それ以外のたくさんの業務があります。

物を送るのはとても難しいです。ほしいところに、ほしいりょうが、またほしいタイミングで届かないとじゃまになってしまうことさえあります。原則、物の支援はしない方がよさそうです。

ボランティアも最近は熱中症にかかることも多いです。休みを頻繁にとるとか、作業を朝と夕だけにするなどの方法があります。

ボランティアの4つの原則は、「社会的包摂・社会参加促進」「自主性・自発性・主体性」「無償性・互酬性」「創造性・先駆性・開拓性」です。「無料」ということだけではないのです。

災害ボランティアの制度は阪神淡路大震災の後に成り立ってきました。ボランティアセンターがボランティアの交通整理をすることがあります。災害を経験した人がほかの地域に入って、サポートしようとしても、その地域を知らないわけで、受け入れてもらえないこともあります。原則は地元の人が、ボランティアセンターを運営することになります。

2004年に社会福祉協議会がやることが決まりました。災害現場にボランティアがはいることで、何十億円という自治体の持ち出しをしないで、支援を受けることができます。

函館市は、青年会議所やライオンズクラブが率先して駆けつけることになっています。

コミュニティマッチングというものがあります。一つの地域にボランティアを送って、その中で采配してもらおうという取り組みです。

災害は、それぞれの専門に長けた人によってもらうのがいいです。全国的なNPOの団体もあります。



災害に対して知識を持っておくことも大切です。水害の場合、その程度によってランクがあります。自分できれいにしてしまっては認定が下がります。そのままにしておくと、写真を撮っておくとかが大切です。また、消毒についても、手順を間違えると、自分のからだを壊してしまうことにもなります。

災害時に、法的なことなどは、弁護士、司法書士などに聞いたり、生活再建ノートなどを見たりすることも大切です。

災害が起こったら、行政に頼るのは無理です。避難所の原則は自治です。ルールについて役場を責めても始まりません。

能登地震は1月1日であり、全くの想定外だった。役場も機能しませんでした。親戚が来るなどもあります。また、火災も起こりました。津波が来るということで、火災に遭った方を助けることもできず、高台に逃げましたが、津波は来ませんでした。その分、海面が隆起しました。

災害の避難などもマニュアルがあってもその通りにいかないことがあります。目の前の人で助け合うことが大切です。平時の関係性が大切です。

また、ボランティアを装って、泥棒などに入るなども現実としてありますが、何千分の一です。性善説でないと、やっていけないものです。

災害の直後はボランティアに助けてもらったとしても、その後は自分たちで何とかしなければなりません。自分事と考えなければなりません。

見なし仮設住宅に入り、周りに誰も知っている人がいなく、引きこもってしまいます。同じ地域でも被災している人と被災し

ていない人との分断ができてしまいます。会話をしなくなります。被災判定で差が出て、お金をもらう人、もらえない人の差で、仲が悪くなります。東日本大震災では、同じく津波に遭っても、原発が絡む地域とそうでない地域の補償の差は著しいものがありました。このようなことで、学校で子どもがいじめられるなども発生しています。

個人情報の扱いですが、災害対策基本法が改正され、福祉的支援には個人情報を開示できることになりました。牧之原市では、竜巻に遭った家のリストを専門家に渡し、一早い救援ができました。

避難所では、声が大きい人が仕切ると、多様な視点が沈黙することになりかねません。

ある災害では、1300人が被災しても、避難所に行った人は10名だけでした。避難所の環境を良くすることも普段から考えておくことが大切です。

感想

大きな災害を経験するということは、生涯に一度あるかないか位の確立であり、災害を遭うのは、ほとんどの方が初めてであろう。どうしていいのかわからないということも事実です。

では、何もできないかという、そんなことはありません。「防災グッズ」という言葉が市民権を得てきましたし、水や食料を備蓄する家庭も増えてきています。

防災についても、ある程度の知識を持っていることも大切です。私は機会あって、防災士の資格を取りましたが、普段の備え、避難所のルールなど、きっと生かせる

であろう知識を身に付けることができました。

また、自助、共助、公助についても、再確認することができました。大きな災害が起きると、まず、隣近所で助け合わなければなりません。隣人にどんな人が住んでいるのか、支援が必要なのかなど、普段からの挨拶や声掛けなどが大切です。それと、災害が発生した場合、どう逃げるのか、逃げないのか、逃げるとしたらどこへ逃げるのか、何を持っていくのかなど、自分でも

点検すると共に、町内会や自治会単位で、訓練をしてみるということも大切であると考えました。

また、災害時にアマチュア無線が有効に活用された事例が多くあります。普段からワッチして、また、アンテナ、電源、電池などを整備しておき、普段の通信網が打撃を受けた場合、活用場面がやってくることをいつも心に留めておきたいと思いました。

(2025/11/15 執筆 佐々木 朗)